

女子短大生の親子関係と健康

母子保健研究部 加藤 忠明
調査研究企画部 大西 晴子
共同研究者 北原 歌子・山崎 森
井狩 芳子(和泉短期大学)
栄本 和子(和泉短期大学)
伊志嶺美津子(女子美術短期大学)
永田 陽子(武蔵野女子大学短期大学部)

女子短大生637名を対象に「親と子の絆」に関する質問紙調査を行なった。出生順位や祖父母との同居など表面的な家庭状況が直接、親子の絆に影響する事はなかった。対象学生は、弟や妹をもつことが多く、日頃から自分より年下の子と接していることによって成長後も子供に関心を示しやすくなり、児童福祉学科に在学していると考えられる。対象学生の親子関係はおおむね良好であった。この場合、しつけがきびしかったり、過保護だったり、放任主義かどうかは、度を越えなければ親子関係に大きな影響は与えていなかった。怒りっぽい学生は、今の生活に満足せず親に対して批判的な回答が多く、親子関係の調整が望まれた。腹痛や下痢をしやすい学生は、家族関係良好が少なく、過敏性大腸の学生が含まれていると考えられる。健康問題に関する愁訴数の少なさ、家族関係の良好さ、そして生活の満足度は共に関連していた。自宅通学生の食行動に関しては、食事時刻が決まっていて家族全員で食べる学生の方が家族関係良好が多く、不定愁訴の発症は少なかった。

見出し語：親子関係、親と子の絆、健康、不定愁訴、食行動

Parent-Child Relationship and Health about Female Students of Junior College

Tadaaki KATO, Haruko OHNISHI
Utako KITAHARA, Mori YAMAZAKI
Yoshiko IKARI, Kazuko BIMOTO
Mitsuko ISHIMINE, Youko NAGATA

The investigation into questionnaire about Parent-Child Bond was studied. The objects were 637 female students of junior college. They had more younger brother or sister than general Japanese. It is considered that they are in college of the department of child welfare because they were apt to experience to contact the children who were younger than themselves. The parent-child relationship of the objects were generally good. In those cases the strict breeding, the overprotection, or the let-alone policy of parents did not have much influence on the parent-child relationships if those did not go too far. Some of the students who had abdominal pain or diarrhea did not have good family relationships. It is considered that many of them had irritable colon. The less complaints about health problem, the good family relationships, and the satisfaction of their lives had correlation with each other. The students who ate with family at definite time had better family relationships and less complaints about health.

Key Words : parent-child relationship, parent-child bond, health, complaint about health, eating behavior

I 研究目的

親子関係に関しては、様々な分野での研究が行なわれているが、健康との関連でみた研究は必ずしも多くない。私達は別の報告¹⁾で、現代の女子短大生の親子の絆についてまとめたので、今回はそれと健康との関連に焦点をあてて分析しようと試みた。

将来多くの者が保育者となり、また母親となる人達自身の親と子の絆がどの様に形成されるか、またそれと不定愁訴等との関連の有無を分析することにより、逆に現在の育児の多様性の中で、比較的何が問題になりやすいか、また何が問題となりにくいか考えてみたい。

II 対象と方法

神奈川県にある和泉短期大学児童福祉科の女子学生637名(1年生428名、2年生209名)を対象に、1990年6月に質問紙調査を行ない、全員より回答を得た。

III 結果と考察

1. 家庭の背景

対象となった学生の兄弟数を表1に、出生順位を表2に示す。対象学生は同年代の人口構成と比べて、一人っ子が少なく兄弟数は有意に多く($X^2=50.13$, $p<0.001$)、出生順位が有意に早く($X^2=19.29$, $p<0.001$)、弟や妹がいる学生が多かった。兄弟数は多い方が「親の愛情を受けられなかった」、「もっと大事にして欲しかった」などと思う割合、また母親は有職の方が「自分は今の生活に満足していない」割合が高かったが($p<0.05$)、これらの相関係数 r は0.10前後と低く、ほとんど関連がないくらいであった。

祖父母との同居の有無では、同居有り148名(23.3%)、無し487名(76.7%)であり、昭和60年国勢調査²⁾の各々24%、76%とほぼ同割合であった。出生順位や祖父母との同居の有無と、親子関係の項目とは、ほとんど関連は認められなかった。

表面的な家庭状況が直接、親子の絆に影響することはほとんどないが、弟や妹がいて日頃から自分より年下の子と接していることによって、成長後も子供に関心を示しやすく、児童福祉学科に在学していると考えられる。

2. 親、家族との関係

「親の愛情を受けられなかった」、「もっと大事にしてほしかった」とよく思う学生は両者とも10名(1・

6%)と少なく、多くの学生の親子関係はおおむね良好であった。「親が嫌い」、「しつけがきびしい」、「過保護」、「放任主義」かどうかは、回答が大きく分かれていた。

「親と子の絆」を大切にしたいと思う学生の割合は95.8%であり、81.1%の学生がそれは「愛情のつながり」であると回答していた。

学生の家族との関係は、「まあ良好」も含めると、85%以上の学生が「良好である」と回答していた。しかし、父または祖父母との関係は、母や兄弟との関係に比べ各々「良好でない」が多かった($p<0.001$)。

「父を嫌い」と「母を嫌い」の2項目は、家族関係を示す項目と有意な関連($r=0.16\sim0.58$, $p<0.001$)が認められ、親子の絆の形成が不十分な場合に、親を嫌いになりやすいと考えられる。

父または母が放任主義の場合は、家族関係が良好でないことが多かったが($r=0.12\sim0.19$)、これらは弱い関連のみであった。しつけのきびしさや過保護などの養育態度と親子関係との関連はほとんどみられなかった。しつけがきびしかったり、過保護だったり、放任主義かどうかは、度を超えなければ親子関係に重大な影響を与えないと考えられる。

3. 健康との関係

① 愁訴項目

学生自身の健康問題について当てはまる愁訴項目に複数回答させた(表3)。この有訴率の順位は、昭和61年度国民生活基礎調査⁴⁾での15~24歳の有訴順、「体がだるい」、「肩こり」、「月経不順」、「腹痛」などとほぼ同様の結果であった。

有訴率が高かった「肩こりがある」、「疲れやすい」、「便秘をしやすい」、「太り気味である」、「生理が不順である」などの項目は親子関係と有意な関連は見出されなかった。しかし、それら以外の愁訴項目と親子関係とは、以下のようにいくつか有意な関連がみられた。

最も多く関連がみられたものは「怒りっぽい」であり、怒りっぽい学生は、「今の生活に満足していない」、「もっとよく育ててほしかった」が多く($x^2=10.21\sim20.56$, $p<0.01\sim0.001$)、「父を嫌い」、「母を嫌い」($x^2=18.41\sim35.09$, $p<0.001$)、「父は放任主義」、「母は放任主義」($x^2=8.44\sim12.23$, $p<0.01\sim0.001$)、「父は過保護」($x^2=8.06$, $p<0.01$)、「母のしつけはきびしい」($x^2=4.11$, $p<0.05$)、「母との関係」、また「家族全員との関係」は良好でない($x^2=6.49\sim9.11$, $p<0.05\sim0.01$)が多かった。

表3. 学生の健康問題

健康問題（多い順）	回答学生数
1. 肩こりがある	254名 (40.3%)
2. 疲れやすい	219名 (34.7%)
3. 便秘しやすい	216名 (34.2%)
4. 太り気味である	149名 (23.6%)
5. 生理が不順である	145名 (23.0%)
6. 頭が時々痛い	122名 (19.3%)
7. おなかが時々痛い	111名 (17.6%)
8. 風邪をひきやすい	110名 (17.4%)
9. 虫歯が多い	101名 (16.0%)
10. めまいをおこしやすい	96名 (15.2%)
11. 下痢しやすい	88名 (13.9%)
12. 骨折をしたことがある	75名 (11.9%)
13. 湿疹が多い	55名 (8.7%)
14. 眠りが浅い	52名 (8.2%)
15. 腹痛がある	49名 (7.8%)
16. 怒りっぽい	48名 (7.6%)
17. 鼻血を出しやすい	31名 (4.9%)
18. 口の中にフタフタがでしやすい	28名 (4.4%)
19. けがをしやすい	27名 (4.3%)
20. 熱が出やすい	25名 (4.0%)
21. やせ気味である	24名 (3.8%)
22. 自分の体臭が気になる	20名 (3.2%)
23. ぞーぞーいいやすい	18名 (2.9%)
24. 食欲がない	13名 (2.1%)
25. 学校を休むことが多い	6名 (1.0%)
26. 特に問題はない	86名 (13.6%)

表1. 兄弟姉妹数（本人を含む）

兄弟数	対象学生 (%)	(昭和45年出生率 ^{*)})
1人	34人 (5.4%)	(14.2%)
2人	371人 (58.4%)	(57.8%)
3人	200人 (31.5%)	(23.4%)
4人以上	30人 (4.7%)	(4.6%)
合計	635人 (100%)	(100%)

*）昭和45年人口動態統計²⁾の出生順位別出生児数よりモデル値として計算した

表2. 出生順位

出生順位	対象学生 (%)	(昭和45年出生率 ²⁾)
1番目	315人 (49.8%)	(45.4%)
2番目	263人 (41.6%)	(39.0%)
3番目	49人 (7.7%)	(12.7%)
4番目以降	6人 (0.9%)	(2.9%)
合計	633人 (100%)	(100%)

表4. 家族関係別の愁訴数

家族関係	良好である 平均±標準偏差 (人数)	まあ良好である 平均±標準偏差 (人数)	余り良好でない 平均±標準偏差 (人数)	よくない 平均±標準偏差 (人数)
父との関係は	3.13±2.16 (217)	3.13±2.15 (313)	4.08±2.65 (65)	5.00±3.13 (26)
母との関係は	3.09±2.19 (364)	3.50±2.33 (228)	3.96±2.69 (28)	4.71±2.93 (217)
兄弟との関係は	3.28±2.24 (305)	3.26±2.34 (237)	3.63±2.59 (40)	3.75±2.30 (12)
祖父母との関係は	3.13±2.25 (204)	3.43±2.18 (258)	3.42±2.57 (59)	5.39±3.70 (18)
家族全員との関係は	3.03±2.18 (274)	3.48±2.27 (312)	3.84±3.19 (37)	3.67±2.34 (6)

これらは学生自身の性格による回答のし方の違いにもよるのであろうが、怒りっぽい学生に対しては、親子関係や家族関係の調整が望まれる。

「下痢をしやすい」学生、また「腹痛がある」学生は、各々「母との関係」と「家族全員との関係」は良好が少なかった ($x^2 = 3.78 \sim 6.36$, $p < 0.05$)。軽度の過敏性大腸(精神的ストレスが原因で下痢、便秘、腹痛などが生じる病気)である学生が多く含まれていると考えられる。

「風邪をひきやすい」学生、また「頭が時々痛い」学生は、「父を嫌い」が多く ($x^2 = 5.32 \sim 5.93$, $p < 0.05$)、健康について「特に問題はない」学生は、「父を嫌い」が少なかった ($x^2 = 6.23$, $p < 0.05$)。「学校を休むことが多い」学生、また「口の中にブツブツができやすい」学生は「父のしつけはきびしい」が多かった ($x^2 = 6.89 \sim 10.27$, $p < 0.01$)。健康で元気に学校に通う娘の方が父子関係はよくなりやすいことを示している。

「けがをしやすい」学生は「父は放任主義」が多く ($x^2 = 7.50$, $p < 0.01$)、「骨折をしたことがある」学生は「兄弟関係は良好」が多かった ($x^2 = 7.04$, $p < 0.01$)。学生自身の活発さ、活動性のためであろう。

② 愁訴数

「特に問題はない」以外の愁訴項目に丸のついた数は、学生一人当たり平均 3.30 ± 2.30 個であり、最高14個であった(有効回答数632人)。この愁訴数は、因子分析で「今の生活の満足度」と共通因子として取り込まれた項目であり¹⁾、生活に満足している場合 2.83 ± 2.01 個(89人)、まあ満足している 3.13 ± 2.22 個(364人)、余り満足していない 3.62 ± 2.26 個(150人)、満足していない 5.50 ± 3.31 個(24人)であった。

家族関係の良好な程度別にこの数を表4に示す。家族関係が良好であると回答した学生ほど愁訴数は少なく、兄弟以外の家族関係と愁訴数は有意に関連していた ($r = 0.11 \sim 0.16$, $p < 0.01$)。愁訴数の少なさ、家族関係の良好さ、そして生活の満足度は共に関連があることを示している。

愁訴数が多いほど、「もっとよく育ててほしかった」、「親の愛情を受けられなかった」、「もっと大事にしてほしかった」、「父を嫌い」、「母を嫌い」が比較的多かったが ($r = 0.10 \sim 0.15$, $p < 0.01$)、愁訴数と「しつけがきびしい」、「過保護」、「放任主義」とは有意な関連は認められなかった。

4. 食行動との関連

夕食の時刻が日によって違うより、いつも決まって

いる方が家族関係は良かった ($x^2 = 20.69$, $p < 0.001$)。また、自宅通学生の場合テレビを見ながら食事をしたり、家族一緒に食べたいが時間的に無理と回答した学生に比べ、家族一緒に食べたり、食卓を家族の囲らんの場にしてしている学生の方が家族関係良好が多かった ($p < 0.05 \sim 0.001$)。朝食や夕食を家族全員で食べる場合は、食事時刻が決まっていることが多く、一人で食べる場合は日によって違うことが多かった。従って、一人で食べるより家族全員で食べると答えた学生の方が家族関係良好が多かった ($p < 0.05 \sim 0.01$)。

健康問題との関連では、朝食の時刻が日によって違うよりいつも決まっている方が、「生理が不順である」、「虫歯が多い」、「めまいをおこしやすい」が少なく ($x^2 = 4.55 \sim 6.94$, $p < 0.05 \sim 0.01$)、夕食は一人で食べたり友達と食べるより、家族全員で食べる方が、「風邪をひきやすい」が少なかった ($x^2 = 3.84 \sim 6.80$, $p < 0.05 \sim 0.01$)。不定愁訴の発症と食行動との関連は以前より指摘されているが⁵⁾⁶⁾、ここでも改めて示されている。

表3の中で「食欲がない」学生は、「母を嫌い」が多く ($x^2 = 14.60$, $p < 0.001$)、「母との関係」は良好が少なく ($x^2 = 5.49$, $p < 0.05$)、また、夕食を「だいたい家で」、「家族全員で」食べることが少なかった ($x^2 = 4.95 \sim 6.89$, $p < 0.05 \sim 0.01$)。自宅にいる場合、夕食はなるべく家で家族一緒に食べられるようにしたい。

学生自身の偏食は無い方が、「風邪をひきやすい」、「めまいをおこしやすい」、「骨折をしたことがある」が少なかった ($x^2 = 4.43 \sim 10.01$, $p < 0.05 \sim 0.01$)。偏食と健康問題との関連が再認識される。

文 献

- 1) 北原歌子、加藤忠明他：親子の絆—学際的アプローチ、和泉短期大学研究紀要第12号：97~124、1990。
- 2) 厚生省統計情報部：昭和45年度人口動態統計。
- 3) 総務庁統計局：昭和60年国勢調査報告。
- 4) 厚生省統計情報部：昭和61年度国民生活基礎調査。
- 5) 水野清子、染谷理絵他：思春期における栄養・食生活・摂食異常の現状と対策に関する研究。日本総合愛育研究所紀要第24集：33~46、1988。
- 6) 原田康子：現代人の食生活に関する研究(2)。和泉短期大学研究紀要第10号：69~77、1988。